

〔目的〕近年、ビタミン剤や栄養ドリンク剤をはじめ、いわゆる健康食品などの「健康志向食品」が販売されている。我々は栄養指導時に、これらの利用者が増加している印象を受けており、使用の是非についても考慮すべき場合が多い。そこで、これら「健康志向食品」が利用される背景を明らかにするために調査を行った。

〔方法〕1992年11月、都内某大手商社の定期健康診断時に、22歳から61歳までの男性社員1949人を対象に「健康志向食品」の利用状況、生活状況、運動習慣、体調などについてアンケート調査を実施した。回収率は1321人(87.8%)、その内有効回答数は919人(69.6%)であった。統計的検定は、FACOM M-350Rを用い、統計処理パッケージ ANALYSTにより行った。

〔結果〕対象は、「健康志向食品」を利用しない非利用群543人と、時々あるいは常に利用する利用群362人に分け、更に2群を40歳未満の若年群と、40歳以上の中年群に分けて検討した。各群の人数は、非利用・若年群316人、非利用・中年群227人、利用・若年群227人、利用・中年群135人であった。現在の体調について、糖尿病・高血圧などの「慢性疾患にかかっている」者が、非利用群と利用群とも、若年群と比べて中年群の方が多かった($P<0.05$)。「熟睡できない」者は、利用群において若年群に比べて中年群が有意に多かった($P<0.05$)。利用する「健康志向食品」の種類は、若年群で総合ビタミン剤が48.0%、ビタミンCが48.0%で最も多く、次いで栄養ドリンク剤29.1%、ビタミンB群19.4%であり、中年群では総合ビタミン剤49.8%、ビタミンC39.3%、ビタミンE24.4%、ビタミンB群17.8%の順であった。栄養ドリンク剤を利用する者は若年群が中年群よりも有意に多かった($P<0.05$)。

〔まとめ〕以上のことより、若年群と中年群では、利用する「健康志向食品」の種類と理由に差があるものと思われた。